

芥沢文学愛好者通信

2022年 11月3日
芥沢文学愛好者の会

☆☆☆☆☆☆
上間 スピーチ
3分間 第3号発行

『令和5年紙上3分間スピーチ』

要領

来年（令和5年）も新年会が中止となったことで、『令和5年版、紙上3分間スピーチ』を作成します。
『記入要領』は次の通りです。よろしくお願いたします。

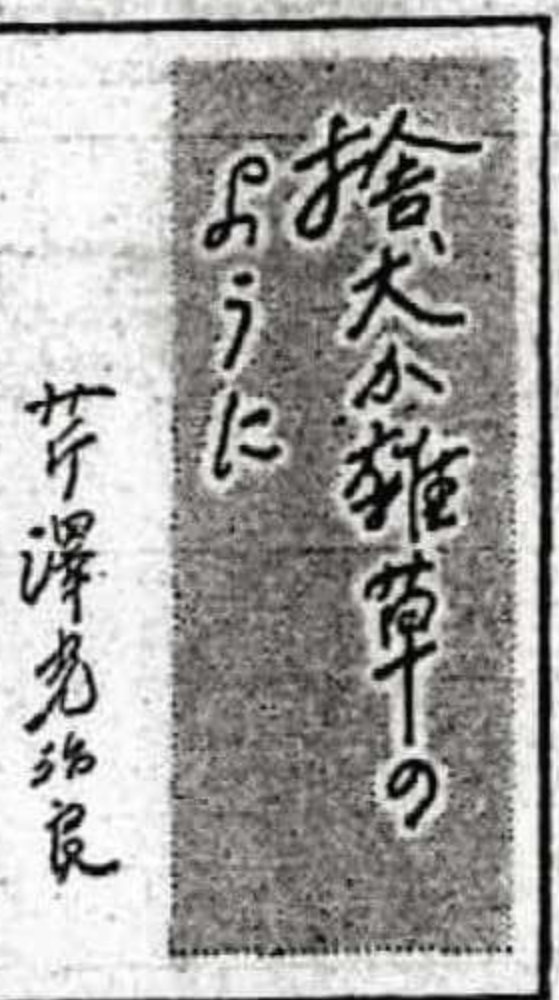
- 記入要領
- 1 記入用紙は同封のハガキを使用。二枚同封で一枚は予備用（個人でお持ちの白紙のハガキにパソコンで印字も可）
 - 2 ハガキに記入する筆記具。
① 鉛筆は不可（印刷機が読み取れないため）
② 黒のボールペン、黒のサインペン、黒インク使用
 - 3 文章はハガキ一枚片面で。
 - 3 締切・令和4年12月20日（火）
 - 4 発行日・令和5年1月25日 送付予定
 - 5 ハガキの送付先、連絡先 安井正二宛

『自伝抄』連載について

芹沢先生が80歳の時、読売新聞に連載された『自伝抄』をご紹介します
新聞記事をコピーしましたが、45年も前の新聞とあって、活字は小さく、新聞紙は色あせて読みにくい仕上がりになってしまいました。
そこで、パソコンで書き写しました。内容は先生が過ぎし日を思い出され、32歳までの日々を、語りかけるように書かれたものです。楽しみにご期待ください。

今年の元旦には、孫娘の一人が五年ぶりにパリから帰ったとて、訪ねて来た。去年パリの音楽院を卒業するなり、パリのプリ・オケ（オーケストラ・コンセルバトアル）の団員になったので、まもなく年末休暇で日本に帰られたというのに、三日にはもうあわたたしくパリへ帰ったのだが、

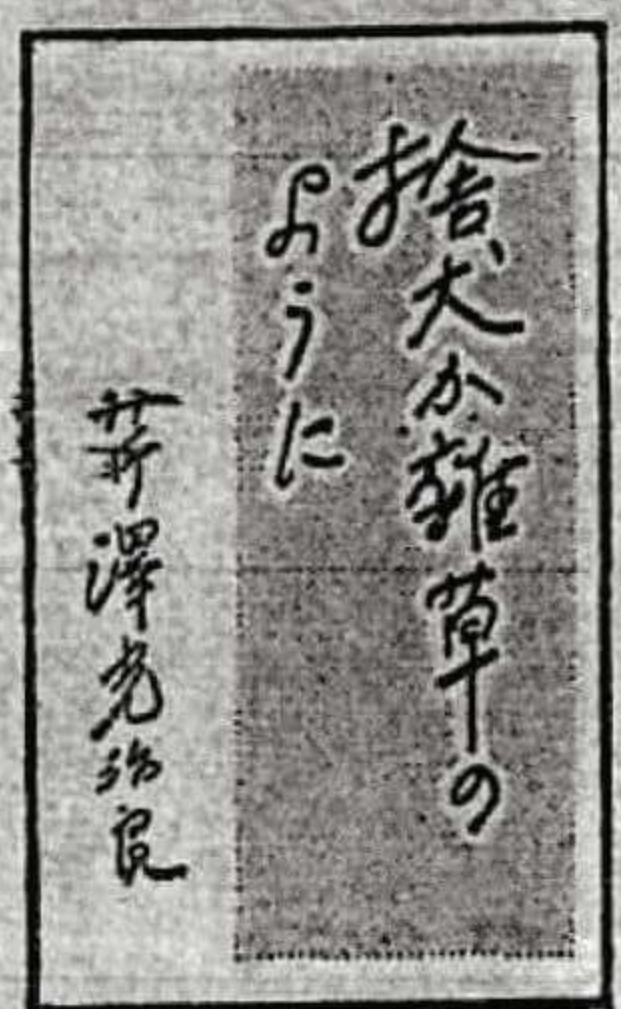
自伝抄



「おじいさまは還暦一年のお正月 医者からそう喜ばされた翌々日、

昭和52年（1977年）1月5日

自伝抄



第1回

三つの時、両親が蒸発

今年の元旦には、孫娘の一人が五年ぶりにパリから帰ったとて、訪ねて来た。去年パリの音楽院を卒業するなり、パリのプリ・オケ（オーケストラ・コンセルバトアル）の団員になったので、ようやく年末休暇で日本に帰れたというのに、三日にはもうあわたたしくパリへ帰ったのだが「おじいさまは還暦二年のお正月ですって？ 八十歳ではなかったの」と、訝かしげに私の赤いチョッキに目をおいて、「お弱かったから、もうお目にかかれなないかと思つたのに、お元気で……お目出度う」と、挨拶した。

それ故、やむなく孫に話したのだった。去年の四月中旬定期診断を受けた医者から、持病の喘息もようやく完治して、これで病弱だった一生が終わったから、今度の誕生日には本卦帰りのつもりで赤いチョッキを着て、生まれかわって人生を再出発する還暦の祝いをするように言われた、と。

医者からそう喜ばされた翌々日、芥沢文学館の創立者岡野さんの秘書から電話で、頭取が赤いチョッキを贈りたいが受けてくれるかときかれしたが、医者と頭取とは連絡があるはずはなく、私の喜びの波動が頭取に伝わったものと喜び、若い岡野さんの長い友情に感謝して、故郷の芹沢文学館でいただくこと答えたことも話した。そして、当日（五月上旬）文学館に向くと、文学館前の松林に大きなテントが張られて、私の長寿を祝う会だといって、沼津市民や旧友が集まっているの仰天したことや、赤のチョッキをもらいに行つたのに、立派な赤の上衣とグレーのズボンに赤のベレーをその日に間にあうようにとパリのモッシュ・エフィエス商店から飛行便でとりよせてある

ばかりでなく、皆私が数えて八十歳を迎えるという祝辞を述べるので、私はただ当惑して、あくまで還暦を迎える挨拶と謝辞をのべたこと話を話して、

「歳月は不思議なものでね、個人によつて速度がちがうものらしく、生まれた年から数えれば八十年かも知らんが、知能も体力も還暦の六十一歳だと、去年名医が保護してくれただから、僕は還暦二年、六十二歳だよ。今年も大いに勉強しようよ、一年の計を樹てているのだよ。特に、去年、還暦の祝いに故郷のむらのお偉方も出席して……多年の「村八分」を解除しようと、考えたのだからね。それから十日後、むらを挙げて公会堂に集まり、僕が講演すること、村八分の解除の手打ちができたのだからね、七十何年ぶりか……」

その点でも、僕はさすがにしくなつて、新しい気持ちになり切らなければならぬよ」と、加えた。
「村八分って、一体なんのこと？」
「村の不文律のおきてを破つて、中学生になつたからと言って、誰も挨拶してくれなくなつてね、僕を仲間外れにしたのさ。ずっと村の人の扱いをしてくれなかった。文学館が松原にできてからも、村にはこだわりがあつたようだよ」

「わたくし、おじいさまのこと、何も知らなかったわ。おじいさまに中学生の頃があつたなんて。ね、昔のこと聞かせてー」
「そうだな、僕がパリで勉強した頃は、パリの新年はやり切れないほど淋しくて……チョコレートを持つて知りあいの老人を訪ねると、必ず過去のことを話してくれたが、そういう伝統だったよ。……そうだ、お前は僕が三つの頃に両親にすてられたことも、知らないのだったな」
三歳の時に両親にすてられれば、人間は捨犬のような本能的な感覚を持つようになる。その上貧困であれば、雑草のように強靱でなければ生きられない。そのことがわが一生にどう影響したか、孫娘にどう話すべきかを迷つたがー

つづく